

---

通史：半世紀のあゆみ

# 青春のパライストラ

## 大学紛争とは何だったのか

編 集 部

---

### 1. 転換期に思う

堀江監督時代には、まだ「昭和45, 46, 47年度」の3年間が残っている。だが、その足跡をとどめておく前に、「大学紛争とは何だったのか」を再考しておきたい。この問題に答えるために恰好な手記がある。「30周年記念誌」の伴義孝手記「転換期に思う」をそのまま引くことにする。

◇

私が監督になったのは昭和48年度からであるが、その後の部活動を概括するには、堀江監督の範囲と重複するかもしれないが、少々さかのぼる必要がある。それはこの時代と期を異にして新しい指導方針を立てなければならなかった背景を私なりに受け止めたことについて、ご理解とご批判を仰ぎたいからである。

#### 敬意

私は、昭和43年に関西大学体育教員として就職すると同時に、関西大学レスリング部のコーチの一員となることを仰せつかった。当時は、昭和39年の春季リーグ戦（故村山栄治主将の時）以来、西日本学生レスリング・リーグ戦において8連勝

を続けて記録をさらに延ばそうと鋭気の漲っていたときである。しかしリーグ戦にかぎって言えば、連勝を続けて行くためには、かなりの苦戦が予想されていた。日本協会の「協会誌」に、当時の西日本学生レスリング連盟会長・松井清氏が、その経緯を次のように講評している。

……戦前の予想では、個人個人を見た場合は昨年度とほとんど同メンバーの近大かと思われましたが、チームとしてみた場合は、まず第1に関学の優勝で、あるいは組み合わせの都合では同大とも思っていたのだが、一番実力に劣る関大が優勝したことは、自力以上の力を発揮し、やはり伝統の賜物としか思われない……。

それにもかかわらず、監督と選手の奮闘ならびにOB諸氏の支援で9連勝をものにした。秋には余勢を駆って10連勝を飾ったのである。

昭和44年は数名のポイントゲッターを卒業させさらに戦力低下をきたしたのである。が、この年も監督と選手の奮闘ならびにOB諸氏の支援で春秋を勝ち抜き12連勝を達成した。同じく松井清氏によれば、春は次のような戦力状態であった。

……本年一人の卒業生もなく、昨年と同メンバーの近畿大学、ほとんど無傷の関西学院大学の両校に引きかえて、多数のポイントゲッターの卒業で戦力低下の、おそらく誰が見ても優勝の要素のない、5、6位が順当の関西大学が、11連勝を遂げたことは伝統と気力とチームワークで勝ち抜いたとしか考えられず……。

こうして秋も勝って12連勝となった。この12連勝は、関西大学レスリング部のリーグ戦連勝記録の3大記録(昭和29年秋から昭和31年秋までの「5連勝」、昭和35年春から昭和37年春までの「5連勝」、それにこの「12連勝」)のひとつであり、通算27回目の一部リーグ優勝の記録である。

さてこうした記録は部員の自覚なしには成りえない。またOBの情熱と支援がさらに彼ら現役を発奮させなければ、成就しないことは、言うまでもない。現在の監督としての立場から、絶大の敬意を、その両記録の当事者ならびにすべての記録に携わった諸氏に捧げたい。

## 大学紛争

昭和43年頃より東京方面の大学に端を発し、全国的に大学紛争が激化し、大学スポーツもその渦中に巻き込まれるようになった。このことはかならず関西地方にも近々波及するであろうとたやすく予想できた。関東学生レスリング連盟ではその春のリーグ戦は圧倒的優勢で日本大学が優勝している。秋の王座決定戦に向けていた時、大学紛争に巻き込まれてしまった。このことは当時大学関係のレスリング指導者の間で色々興味深く我が身と照らし合わせて話題とされたものである。当時の日本大学レスリング部の部員が「学園紛争とレスリング部」と題して次の一文を寄せている。

……昭和43年6月4日われわれの努力が、功を

奏し、…略…われわれの全勝優勝に終わった。…略…心は、そのまま王座優勝にかたむいていた。…略…しかし6月16日、突然、経済学部ToStrayキが起こった。数日後、学園は、次々と彼らによって封鎖されていった。もちろん本部も占領された。「本部の地下!」。われわれは愕然とした。そこには、われわれの汗が深くしみ込んだマットがあった。練習は、やむなく中止された。われわれに不安の日々が続く。…略…仮の道場を借りた。しかしそこでの練習はごく短いものだった。マットを借り受ける資金が続かなかったのだ。再び道場を探すはめになった。…略…落ちつかない日々が続いた。…略…練習に身が入らない。「やはり、ここではダメなのか?」。幹部の胸には、一抹の不安が生じた……。

この一文を読んで、近々こうなると、既に関係者は想像していたのである。この大学紛争は1年遅れて関西大学にも波及した。昭和44年6月20日、「ヘルメットにゲバ棒、覆面で武装した全共闘に属する諸君が他の大学生と共に、突然、大学本部のある関大会館に乱入し、これを占領」し、会館の破壊を始めたのである。この時のゲバ学生への要求のひとつに、「体育推薦入学」の廃止があり、同時に「関大右翼体質を打破する」のスローガンのもとに、体育会がそれに加担しているという噂や、全共闘の女生徒を体育会が誘拐したという噂などを盛んに一般学生に吹聴していたのである。

## 部活動の低迷化の外因

この頃の激しかった紛争はそのまま尾を引いて数次にわたったのである。その間、大学の機動隊導入によるロックアウトが数回にわたっており、体育会所属の運動部も練習スケジュールを大幅に狂わせることになった。また、日曜日、祭日の学

内立ち入り禁止、午後8時から午前8時までの学内立ち入り禁止事項などの措置がなされ、教育後援会が学生のために寄贈した「合宿所」の使用も禁止措置がやむなくとられることになった。これらは部活動に多大の支障をもたらす結果となった。こうした状況が50年1月17日に至ってもまだ続いていたのである。すなわち学生の一部が学費値上げ白紙撤回を要求し、各学舎を封鎖し、教室その他の重要施設を破壊した。これは学費値上げ反対闘争のため入試実施の妨害をもくろむものでもあった。

この長い紛争は、過激派学生の学内ゲバ殺人事件、学内での爆発物投下事件なども含み、学生に心の荒廃と、無気力と、それに相互の不信をもたらした。かなり以前より学生の間では、「人間性の疎外の克服」がテーマとして取り上げられていたことを思い合すと、何とも皮肉なことだった。この様相は必然的に体育会の各部にも影響をもたらした。部員のなかには、目標を見失って、退部するものが続出した。またその間、幾度か迎えた新入生もそうした状況下であって混迷し、入部希望者も激減してしまった。

ちなみに昭和44年に、それ以降の「体育推薦入学制度」が廃止されるに至ったが、この制度による入学者もすでに漸減方針を実施しておいて、この年のこの制度による入学者は全学で「66名」（全クラブ対象で）の枠内ということになった。しかし実際の入学者、入学試験の結果、その「66名」を下回っている。こういう状態であったから、新入生のなかに、自発的な入部希望者を見つけることに依存しなければならない。そのときの、無気力さの蔓延である。自発的な入部希望者もほとんど期待できなかった。

### 最悪の条件下での努力

先に述べた日本大学も紛争の煽りで昭和43年以

降長らく低迷を続けて、やっと昨今（昭和52年当時）往年の日本大学の威厳をとりもどしつつある。しかし往時の域には遠く及ばない。我がレスリング部にあっては、昭和44年、阿部裕、太田正志、平野泰啓、和田恵夫の4名が入部し、しかもその年の「12連勝達成」のときでもあったので、彼らは我が部の伝統的練習法を身につけた。だが、彼ら4名の前に、「4回生」になるまで立ち塞がったこの紛争である。彼らのみならず昭和44年以降の4回生はリーダーとして、この紛争の被害を被りながら、頭を痛めたのはもちろんのことである。昭和47年度の主将和田恵夫は関西大学『体育会誌』に次のように書いている。



写真▷昭和44年当時「みんな頑張ってます」

……我が部は、昭和23年に創設されて以来多くの輝かしい戦歴を残してきました。ローマ・オリンピック7位、東京オリンピック優勝の市口政光先輩をはじめ、全米選手権大会および世界選手権大会に多くの先輩を輩出し、西日本リーグでは、通算27回の優勝（内12シーズン連続優勝も含む。）を成し遂げ今日に至っています。ところがここ2、3年体育会全般に言えることですが、部員の減少に悩まされて、思うように練習さえできない状態です。多くの先輩により築きあげられたこの伝統あるレスリング部を立

て直し、大きな前進を図るためには、まず、「①部員を一人でも多く集める」「②部の体質改善を図る」「③全員のモラルの向上を図る」など多くの問題を抱えております。これらの問題はどれを取り上げても、今日のレスリング部より、切り離せない重要なことばかりです。今、このピンチに立たされている我がレスリング部では、部長、監督をはじめ、主将以下部員一同、学友諸君の「入部」を仰ぐものであります。

まさに部員獲得に苦勞するときに、始まろうとしていた。さて、長々と堀江前監督の受け持ち範囲におよんだが、それはかようなときに監督を務められたことに対する、敬意の一端を通常の表現体によることなく克明に記しておきたいからにはほかならない。また昭和44年の秋季リーグ戦において、紛争の最も激しい年であって優勝したことは、監督とコーチ陣の、それに指導協力のあった諸先輩方の、さらには当時の現役諸君の、並々ならない努力があつてのことで、そのことを特筆しないわけにいかないからでもある。特にその当事者であつた現役諸君には賛辞を贈りたい。同時に、母校に就職して以来、身近にしながら部員減少にひとつの歯止めをすることのできなかつた、コーチとしての、私の非力を深くお詫びしたい。

### 新しい出発

私が特に昭和47年にこだわるのには次の理由がある。当時の4回生は前出の主将和田、副将太田と阿部、それに主務の平野の4名である。3回生には、唯一第2部に籍を置いていた屋麻戸が、仕事と勉学の合間にレスリングをやりたいということで、2回生になってから練習に参加するようになるまでは、昭和45年以来一人も入部していない。2回生は、3名いたのだが、1名が部を去り、他



写真▷昭和44年当時の「大学紛争関係資料」

の2名もその後退部してしまった。1回生は飯田、岡田、片野の3名が入部し、徐々に新人が入部した、というような状態であつた。しかも大学紛争下にあつて、練習の系統性を欠くようなときで、部員も時として心情の落ち着きを失いがちであつた。こうした練習にも員数的に事欠く始末のときではあつたのだが、堀江監督のもとに、昭和47年度は、次の方針を決定した。

- ▷ 昭和47年度のメンバー不足分は柔道部より借り受ける。
- ▷ 4回生の練習計画は従来どおりにする。
- ▷ 1回生は彼らのペースに任せて練習意欲の向上を待つ。

この決定を当時の4回生は理解してくれた。もちろん部員の勧誘には努めた。だが効果はなかつた。問題は、春に2部落ちてしまったが、その後の3名の1年生を従来どおりの方針で練習させていたら、もしかすると秋には1部復帰も可能ではなつたのかという「反問」であつた。だが指導陣の決定は、そうではなかつた。昭和44年度以降すでに転換期を目の当たりにしてきて焦燥にかられていた指導陣は、昭和47年度の1回生より新たな分節を付けて、関西大学の状況下において、新しい方途を選択せざるをえないと決定していたのであつた。

この当時、紛争の影響があつて、学生間に、物の考え方において、かつてないほどの大きな断層が見られた。それを4回生も理解して、いわば彼らの卒業後、その1回生たちに、跡目を引き継いでくれることを託したのではあつた。4回生の決して近視眼的ではなかつた勇氣ある選択を誉めなければならぬ。この決定に対して、当の指導陣たちがもつた唯一のもどかしさは、その4回生諸君に、2部落ちの悲哀を誉めさせたことである。そして次の年よりの新方針のもとでの「不死鳥の飛翔」に望みを馳せたのである。(伴)



## 2. 昭和45年(1970)・辛労の年

風俗・流行・歌 ウーマンリブ・万博／  
S Lブーム／♪『走れコウタロー』

いよいよ辛労の年を迎えることになる。「12連勝」から、一気に、第5位の春のリーグ戦になってしまった。ただし余韻がある。その余韻を他大学は恐れて評価してはいた。だが絶対的な駒不足は、いつまでも、馬脚を顕さずにはおかない。この年の全貌は、本誌の「青春のパライストラ1970」欄において、吟味していただきたい。その欄に、「なぜ！レスリングしているのか？」と題して、昭和45年度「学連の目」などの関大評と併せて、堀江監督談などを、紹介してある。戦力低下を来すと、当然のことに、話題も少なくなる。そのエッセンスの重複を避けるために、「春・1部5位」「秋・1部3位」の事実だけを記しておきたい。富田主将、尾上副将、増田主務、川那辺、佐藤の4回生が頑張ってくれたものの、「どうしたのか関大！」と同情の声が上がるほどの苦戦ぶりであった。

そんななか、主将の富田力が、関大魂をフルに發揮して、ひとり気をはいてくれた。その闘いぶりは「関大の4年生は強い」の伝統をまざまざと見せてくれるものだった。富田は認められて学連規定の「敢闘賞」を受賞することになった。閉会式での授与に際して、富田は、すべてから大きな拍手で讃えられていた。それほどにも関大の主将の「関大ぶり」を見せてくれたレスリングであったのだ。どんな逆境にあつても、この「関大ぶり」の伝統は、これからも守らなければならない。その「見本」を見せておく、と富田が、後輩たちのために、残してくれた財産ではある。

この年の個人戦では、西日本学生選手権大会において、フリーで62キロ級の富田3位、グレコで57キロ級の森本3位・74キロ級の太田3位。また関西選手権大会において、フリーで62キロ級尾上1位・62キロ級富田2位・57キロ級森本3位・68キロ級和田3位・90キロ級藤田裕充(OB)2位。

## 3. 昭和46年(1971)・大きな断層

風俗・流行・歌 脱サラ・ホットパンツ  
／言葉「ドルショック」／♪『知床旅情』

この年の様相も、「30周年記念誌」から、堀江記述をそのまま引用しておく。



昭和46年度は、山田主将のほか、わずか森本副将、米北、稲本を含めて10名足らずの部員で奮闘しました。春のリーグ戦での主将の声は「昨年は、春季5位から、秋季3位へと上昇ムード。今季リーグは母校の名誉にかけて頑張りたい」で、関係者は「部員減少で苦しいが、重量級が山田主将をはじめとして、和田、太田とまったく安定しているので、軽量級次第の試合展開になるであろう。復

調した稲本、米北の実力は問われるが、森本、阿部等は、試合経験豊富であるので彼等次第で優勝も望める」と、関大の奮起を期待していました。だが、春は5位に終わり、「心機一転、今季リーグは母校の名誉にかけて頑張りたい」と、秋に、成果を問うことになりました。

この関大チームを、「西日本レスリングの歴史を支えてきた関大だが、2、3年生の間に大きな断層がある。部員減少で苦しいが、森本、主将山田、和田、太田という4人のポイントゲッターがいるだけにあと一つ勝ちたいところ。2年に期待できないので阿部、平野にウエイトがかからざるをえない。最も、今季リーグ、伝統と意地を發揮してほしいチームである」と周囲は冷静に見ていました。これに応じて秋季リーグ戦4位と意地をみせてくれました。(堀江)

◇

この年の個人戦では、西日本学生選手権大会において、フリーで68キロ級山田1位、グレコで57キロ級森本3位・68キロ級和田3位・74キロ級山田1位。

風俗・流行・歌 日本人論ブーム／恍惚  
の人・パンダ／♪『瀬戸の花嫁』

#### 4. 昭和47年(1972)・2部転落

部員不足は深刻そのものだった。しかも「しらけ」の時代。和田主将、太田・阿部両副将、平野主務の4名の4回生にとっては痛恨の年になってしまった。昭和44年以来、関大レスリングは、大学紛争の暴威の前に、部員を獲得することもできず悶々としてきた。その苦悶ぶりは既に書いてある。そして、この春、関大レスリング部は、第2部へ転落してしまった。西日本きっての王者「関

大」。前人未到の「リーグ戦27回優勝の関大」。その関大が2部落ちしてしまったのである。その痛恨の全容を堀江監督が、「30周年記念誌」に語っている。また本書においても、その全文を、「青春のパライストラ1972」欄に収録してある。その一部と重複するのだが、この箇所だけは、ここに引いておきたい。

◇

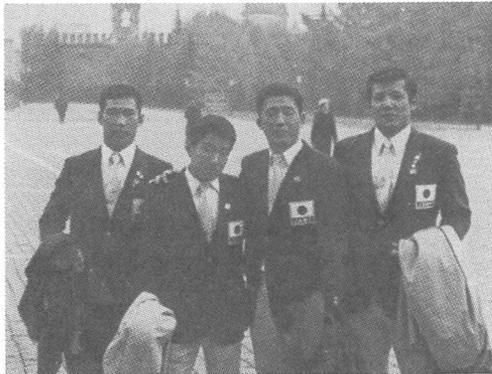
……なにしろ大学の本質である学問さえ正常に行えませんでした。我が部に限らず他の部も壊滅的な打撃を被り、活動は氣息奄奄でありました。かく申せども当事者であった指導陣の力不足は否定できません。真に、45、46、47年度の部員には条件の悪いめぐりあわせでありましたが、その経験を生かして、ご精進されんことをお願いします。また、最悪の条件下の奮闘に誇りをお持ちください。我々指導陣もことあるごとに当時を語って、貴重な経験に感謝しております。(堀江)

◇

この引用箇所の「吐露」について、単に堀江監督のみに、その呵責の念を負わせるわけにいかない。補佐したコーチ陣、神谷、伴、光富にも大いに責任の一端がある。思えば、昭和44年、関大で大学紛争が勃発した年から、それこそ数えきれないほど、堀江「会議所」に、結集して善後策を練ったことか。それは、堀江、神谷、伴、光富の4人だけではなかった。佐々木前監督、堀江監督をとおして、あの「12連勝」の金字塔を打ち立ててくれた、多くの強者のうちから、常に何人かは、加担してくれていた。まだ関大レスリング部OB会が、現在のような堅固な支援体制を確立していないうちのことである。大勢の善意が支えてくれていた。にもかかわらず、この結果になってしまった。改めて、この痛恨の、関大レスリング部50年史の「1頁」をここに記録しておきたい。同時に、さらに改めて、この苦難の「年」を聞いてくれた

当時の現役諸氏に、そしてその現役を支えてくれたすべての善意に感謝しておきたい。

さて堀江監督は、この年かぎり、仕事の都合もあって監督の任を辞することになった。栄えある「12連勝」を達成することにはじまって、痛恨の、「2部落ち」の年までの、もっとも落差の大きい、過酷な任期であったかもしれない。しかし、これが「歴史」である。痛恨の経験は、その人に、その当事者にしか感得しえない、「何か」を残してくれる。「何か」でいいのである。その「何か」



写真▷「ソ連遠征」の松浪さんと和田さん  
(松浪=右から2人目・和田=左端)

が学生スポーツの神髄であるはずだ。

この年の個人戦では、西日本学生選手権大会において、フリーで68キロ級和田3位・82キロ級太田2位。また全日本学生選手権大会において、グレコで82キロ級太田3位。さらに日本体育大学卒で関大コーチを長年にわたって務めてくれた藤浦義隆(関大OB会名誉会員)が、この年の、全日本選手権大会のグレコ62キロ級で優勝している。藤浦はこの頃大いに関大レスリングを手助けしてくれている。その藤浦の活躍を現役が祝福したことは言うまでもない。

この年、和田恵夫が、ソ連遠征メンバーに選ばれている。同遠征には、OBの松浪啓一が同チームのコーチとして参加している。この海外遠征で

は、大学紛争で不穏な空気が漂いだして以来、久方の代表を関大から参加させることができている話題を提供してくれることになった。

## 5. 堀江監督の総括

堀江茂雄は、「30周年記念誌」の「30年のあゆみ」に寄せた手記を「塵劫」と題している。すなわち塵劫とは、「塵点劫」の略で、極小と極大の数を意味していて、極小と極大の流転が織りなすその間に、はかりしれない時間の流れがある、という意味ではある。昭和43年から昭和47年の間、関西大学レスリング部史上、最大の栄冠「12連勝」を経ての、未曾有の「2部経験」へと、実時間は「5年間」に過ぎないのだが、精神世界においては、やはり「塵劫」の時間が去来したと表現すべきことであつたに相違ない。その堀江「塵劫」の「まとめ」をそのまま引いておく。



### 個人戦展望

昭和43年春倉橋、阿部の両選手を全米選手権大会に送りました。阿部はグレコの57kg級で2位に入賞しました。また同じ頃国内では、メキシコ五輪の第1次予選会が開かれ、藤田がグレコのライトヘビー級の2位となり気を吐きました。これらの3選手に期待して関大では盛大に壮行会が開催されました。

4月5日、本学第1グラウンドにおいてレスリング部の倉橋裕(経4)、阿部進(文3)=全米選手権出場のための渡米、藤田裕充(経2)=メキシコオリンピック候補、の3名の壮行会が行われた。中谷学長、久井理事長なども出席され、また本学レスリング部OBの関西大学体育OB会副会長の松井氏は、応援団を先頭にグ

ラウンドを入場行進するレスリング部員を見て感激もひとしおの様子であった。吹奏楽部の演奏する学歌、応援歌ののち、倉橋主将より力強い謝辞が述べられ、盛大のうちに壮行会は終わった。倉橋、阿部の両選手は壮行会が終わるとすぐアメリカ遠征の途についた。……略……これら3選手に対して、特に壮行会が開かれたのは、3人に対するメキシコオリンピックへの期待、海外遠征における好成績がその因である。今後とも、彼らに激励を送り、大いに期待しよう。（発行月日不詳『関大スポーツ』）

この年、西日本学生レスリング選手権大会に次の入賞者を出しました。フリーでは57kg級平池（3位）、68kg級長井（1位）、同北川（3位）、74kg級倉橋（1位）。グレコでは52kg級稲本（2位）、同西尾（3位）、57kg級平池（1位）、62kg級西岡（2位）、68kg級笹井（2位）、74kg級長井（1位）、82kg級倉橋（2位）。また全日本学生選手権大会では倉橋がグレコの74kg級で3位に入りました。

昭和44年2月、前年のメキシコ五輪の関係で43年度の全日本選手権大会が大阪で開催されました。特筆すべきは、当大会でのグレコローマン・スタイルに出場の3選手の活躍でした。フライ級で平池雄三が平山選手（社会人ナンバーワン・後のミュンヘン五輪2位）などを向こうにまわして第2位、ライト級の長井暁が優勝者の荒木選手（日体大）と大接戦を演じ惜しくも第2位、ウェルター級で倉橋選手が岡選手（国士館大出）など強豪を相手に善戦し第3位になりました。優勝者こそ出ませんでしたでしたが、全員メダル獲得は関西勢に刺激を与え、関東一辺倒に一矢を報いました。この年、発奮した部員は、全日本学生選手権大会で阿部が3位になりました。また西日本学生選手権大会では、フリーで57kg級阿部（2位）、同稲本（3位）、68kg北川（2位）、74kg級山田（2位）、グ

レコで57kg級阿部（1位）、同平池（2位）、62kg級西岡（2位）、68kg級服部（2位）、74kg級山田（3位）、82kg級太田（3位）でした。

昭和45年は、西日本学生選手権大会で、フリー62kg級富田が3位、グレコ57kg級森本が3位、同74kg級に太田が3位に入賞しましたが、この頃より部員減少にともない、個人戦においても、低調が続きます。

昭和46年は西日本学生随一の68kg級山田が、西日本学生選手権大会で、2階級優勝（フリー68kg級、とグレコ74kg級）を飾り、不振下の関大に鋭気をもたらしました。また同大会のグレコでは、ほかに57kg級森本（3位）、68kg級和田（2位）などが活躍しました。

昭和47年は、主力の4回生4名の少数精鋭で臨まなければなりません。そうしたなかで、太田が全日本学生選手権大会のグレコ82kg級で第3位に入りました。当時実力では西日本学生ナンバーワンの和田は、故障の不運にみまわれ、おして出場した西日本学生選手権大会の68kg級フリーで3位に入賞しました。またOB関係では、市口政光、伴義孝両OBが、ミュンヘン・オリンピックの強化コーチとして活躍しました。

### 選手のプロフィール

このように混乱期でありましたが、各年度は伝統のまとまりで、各々味のある雰囲気を出していました。また昔日のようなサムライは少なかつたようですが、格闘競技者らしく、独特の個性の強い選手がいました。

倉橋時代は彼と強烈長井がコンビの妙を得て、そこに一風変わった笹井、村上がおり、人間集団の面白みがありました。

北川時代は、この「俊治」が実に良い男で一筋縄ではいかない平池、阿部、服部、井宮などの同輩を率い、富田、山田というムツカシイ後輩を統

率していました。ここに一笔加えると、西岡禮伯がいます。労働、勉学、それにレスリングとどれも怠ることなく、4年間を頑張りとおし、境遇に負けない意思力を感じさせました。

富田時代は、彼自身「細い体」に鞭打って、独特の片足タックルを完成し、尾上、増田、川那辺などと周囲の悪条件と闘いました。

山田時代は、彼のあの「人を食ったような風貌」から想像もできない神経の行き届いたリードが、同輩の米北、稲本、また後輩に注がれました。また彼を助けた森本は地味ながら好青年でした。

和田時代は、彼が実に豪快な男で、いまも変わっていないのは嬉しいことです。太田、阿部、平野もバランスのとれた人物でした。

## 期待

最近（昭和52年頃）キャンパスにも平和が訪れ、部員数も以前に劣らぬぐらいになり、新時代を迎えようとしております。戦力はまだ往時に遠くおよびませんが、徐々に実力が向上しているのはまことに嬉しいことです。昭和51年度の秋季リーグ



写真▷「飛鳥高松塚古墳の壁画」昭和47年発掘

戦での大西司人の執拗な攻撃は「関大魂」の復活にはほかなりません。

私の申し上げるべき科白ではありませんが、後輩諸氏におかれましては、OB会の再編成もあり、これを機になお一層のご支援のほどを賜りたいものと存じます。また現役および今後に入部してくる諸君は、この「30周年」を出発点にして、伴監督（昭和48年度～55年度）のもとに、レスリングを通じて人格の陶冶に励み、それを超越して一個の人間道を完成し、さらに関西大学レスリング部を関東の大学に伍するチームに飛躍させてくれることを懇願します。

末筆ながら、陰に日向に、コーチ陣と選手を叱咤激励して下さった高堂俊彌部長に心から感謝いたします。また良きコーチであった故村山栄治君の霊の安らかならんことを祈ります。



昭和47年度をもって、堀江茂雄は、監督を勇退した。そのおりの心境は、年月を経て記した、この「塵劫」に述べられている含蓄に寸分とも違わないものだと思う。昭和48年度からは、伴義孝が、監督を引き継ぐことになる。（完）

昭和47年3月、本学考古学研究室のメンバーは、奈良県明日香村で極彩色の壁画をもつ高松塚古墳を発掘して世間を驚かせた。教員と学生が寝食を共にして行われるこうした野外調査は、新しい大学教育のあり方に一つの示唆を与えるものであった。

（『関西大学百年のあゆみ』より）